

谷汲村門前町の観光的活用方策に関する一考察

小平育栄，赤羽智奈，古池嘉和

文学部観光文化学科

(2004年9月24日受理)

A Study of a Temple Town as a Tourism Resource A Case Study of Tanigumi in Gifu

Faculty of Humanities, Department of Tourism,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501 - 2592)

KOHIRA Ikue, AKAHANE China and KOIKE Yoshikazu

(Received September 24, 2004)

緒言

門前町は社寺に対する信仰参詣が具象化し景観化された地域現象であると言える。従って、機能的な連続性が担保され、現代に至るまで町の形態や構造が継承される場合が多い。そのため、門前町自体の連続性はある程度担保されるとしても、門前町をとりまく外部環境は日々刻々と変化していく。とりわけ経済の高度成長下にある現代社会にあっては、経済的環境条件は激しく変化している。そのため、門前町と言えども、その歴史性から来る魅力だけで集客できる時代ではなく、外部環境の変化への対応を強く要求されることになる。

もとより社寺には多くの文化財が保存されておりこれらはもともと観光のためにあるわけではないが、それを観光対象とすることによって、あるいは参詣者の体験価値・学習価値を高めるソフトをコミュニティが内包することなど、コミュニティの再構築の視点を含め、門前町繁栄の今日的な方向が模索されると考えられる。

1 研究目的

谷汲村の門前町を評価する際、歴史的なコンテキストの中で今日的存在意義を考えていく。本稿では、とりわけ歴史的な変遷を明らかにすることを第一義的な目的とした。店舗の移り変わり、コミュニティとの関係などを明らかにすることが目的である。その上で、今日、おかれている課題を整理してみた。勿論、本稿で主として考慮した課題は、観光・交流的側面に絞ったものにすぎず、本来的には多様なアプローチが必要であることは認識している。そして最後に、こうした歴史的なコンテキストと観光・交流面での諸課題を受けて、今後の展望を考察することも試みた。

2 研究方法

調査の方法は、歴史的な史実の確認作業は文献調査を中心に、また、現状や課題を明らかにするために現地調査と聞き取り調査を中心に行った。現地調査においては、現状における集客の様相を確認することを目的とした。調査日は平成16年8月24日である。調査対象者は 岐阜県揖斐郡谷汲村教育委員会(文

化歴史資料調査委員会) 専門調査員 寺田 昭士氏, 谷汲村観光協会副会長(谷汲山華厳寺¹総代) 大口 和彦氏, 谷汲村役場 産業振興課長 若林 幹夫氏, 同主事 神原 誠司氏である。

3 谷汲村の概要

岐阜県揖斐郡谷汲村は濃尾平野の西部に位置する揖斐郡の南東部にあり, 平野部に最も近接している農山村である。全村が山林林野に取囲まれ全体の85%が林野で占められ, 耕地は全面積の10%に満たない山村である。人口は, 3,899人(平成14年現在)である。

縄文・弥生式土器文化時代の末幅遺跡, 上長瀬の古墳遺跡等があることから, 谷汲村は数千年もの人類の生活の足跡が刻まれている。

明治22年(1889)に神原村・木曾屋村・有鳥村が合併して横蔵村を創設し, 明治30年(1897)に深坂村・大洞村・名礼村・徳積村が合併して谷汲村となり, 長瀬村・岐礼村・高科村が合併して長瀬村となった。

更に昭和31年(1956)に谷汲・長瀬村の両村が合併して谷汲村を創設し, 続いて昭和35年(1960)に横蔵村を併合して現在の谷汲村となった。

東に根尾川の清流が本巣市と境を劃し, 西に飛鳥川が憩の森に水源を発して横蔵地区の中央部を流れて揖斐川に合流し, 谷汲地区に水源を発して下長瀬にて根尾川に合流する菅瀬川がある。こうしてみると山紫水明の地で東西10km・南北8km・面積73km²の農山村である。

こうした地を選んで約1200年前に天台宗の名刹谷汲山華厳寺と両界山横蔵寺が創建され, 広い地域(関東・関西方面)から参詣者が後を絶たなかったと言われている。

谷汲村は地域的には農山村であるが, JR

は大垣に通じ, バスは揖斐・大垣・岐阜へも通ずるという交通上は恵まれた地域である。道路も暫次拡幅され, 舗装整備されてきた。谷汲鉄道²開通に伴い, 駅前は一新し, 門前の街道も拡幅され, 街道の両側には桜・紅葉が植えられて町並も整備, 商店も増加してきた。また根尾川は夏季漁獵の地として名があり, 土・日曜ともなれば太公望がどっと押し寄せ, キャンプ場への来客も7・8月は満員の状態である。

4 観光地としての特徴

4.1 谷汲村の観光動向

谷汲村観光客数の推移を平成10年(1998)以降について考察してみる。その結果, 表1から分かるように, 谷汲山華厳寺へは年間約100万人以上の観光客が訪れている。つまり, 谷汲村全体の観光客数の約7割は谷汲山華厳寺を訪れていることになる。このことから, 現状では, 谷汲村観光は華厳寺に集中していると言える。

さらに広域的な観光動向から谷汲山華厳寺の位置付けを考察しておこう。表2から明らかのように, 平成15年(2003)度の揖斐地域(揖斐川町・谷汲村・大野町・池田町・春日村・久瀬村・藤橋村・坂内村)における観光客数は, 揖斐地域全体で約340万人となって

表1 谷汲村・谷汲山華厳寺観光客数

単位: 人

	谷汲村全体	谷汲山華厳寺	谷汲山華厳寺参詣者の割合
平成10年	1,376,000	1,007,000	73.2%
平成11年	1,365,000	1,000,000	73.3%
平成12年	1,365,000	998,000	73.1%
平成13年	1,492,000	1,049,000	70.3%
平成14年	1,446,000	1,050,000	72.6%
平成15年	1,405,000	1,033,000	73.5%

(谷汲村役場動態調査)

表2 揖斐地域町村別観光客数(平成15年)

単位:人

町村名	計
揖斐川町	196,500
谷汲村	1,405,373
大野町	331,186
池田町	884,580
春日村	105,214
久瀬村	96,795
藤橋村	360,845
坂内村	22,555
合計	3,403,048

(平成15年岐阜県観光レクリエーション動態調査)

いる。そのうち約140万人が谷汲村への観光客数であり全体の約40%を占めることとなる。

なかでも、表3のとおり、谷汲山華嚴寺への観光客数が約103万人となっており、一ヶ所で揖斐地域全体の約3分の1を占めていることになる。

以上のことから、谷汲山華嚴寺が谷汲村そして揖斐地域の貴重な観光資源であることがわかる。

表3 谷汲村観光地点別・観光客数(平成15年)

単位:人

観光地点名	合計
谷汲ゆり園	43,000
東海自然歩道	19,000
谷汲山華嚴寺	1,033,000
両界山横蔵寺	158,500
谷汲村緑地公園キャンプ場	34,000
根尾川谷汲温泉	55,699
さくらまつり	15,000
もみじまつり	15,000
その他	32,174
合計	1,405,373

(平成15年岐阜県観光レクリエーション動態調査)

4.2 谷汲山華嚴寺(門前町)の観光特性

表4からも明らかなように、谷汲山華嚴寺への観光客は、正月を除いて、4・5月あるいは10・11月の行楽シーズンに多い。これらの集客要因は、様々な行事に負うところが大きいと考えられる。

また、谷汲山華嚴寺は、西国33番の礼所³⁾として知られているため、こうした礼所を巡る「巡礼ツアー」も企画されている。観光業者に対する対面調査(インタビュー)を行ったところ、その中には33ヶ所の僧侶が檀家を連れて来るタイプと、観光業者が企画したツアーに参加するタイプがあることが分かった。また、来訪地域をみると、関東方面から来る場合は、谷汲の後、長野県の善光寺を通過して帰っていくパターンが多いことも確認された。

さらに、谷汲山華嚴寺参詣と長良川鵜飼をセットにして、宿泊は長良川界隈のホテルにしたものや、根尾川ヤナで鮎料理を食べるツアーとセットにした日帰りタイプのものがある。

いずれもバックツアーで販売されているものではなく、老人会や行政関係の旅行などのオファーを受け、業者がその都度企画、商品化されたものがほとんどである。そのため谷汲での宿泊客は、現在ではほとんどなく、行楽シーズンに少しある程度になっている。こうしたことも、旅館が減少したことの要因となっている。

表4 谷汲山華嚴寺月別観光客数(平成15年)

単位:人

1月	2月	3月	4月	5月	6月	
234,000	11,000	45,000	170,000	88,000	66,000	
7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
40,000	54,000	80,000	80,000	135,000	30,000	1,033,000

(平成15年岐阜県観光レクリエーション動態調査)

5 門前町コミュニティの課題

5.1 変遷

西国33番の札所として一千有余年の往古より数多の参拝者・巡礼などの往来があり，門前には自ら町並が出来てきた。すなわち自然発生的に成長してきたと言える。そのことは次のような一節からも伺える。

「是より三丁おく 谷汲に やどちやうやあり
あまた このさきに をいわけあり」

これによってもわかるように，門前にはかなりの町並があったことがわかる。また，巡礼には谷汲山内にてお籠りをして門前の旅人宿にて宿泊した。「えび屋」には旅人宿の看板が，富岡屋には往古より「西国三十三番の三十三体の観音像」「谷汲山華嚴寺の観音像」の版木および「谷汲山縁起録」が残っている。昔の門前には参拝者の「土産物」は何もなく，これが唯一の土産だったらしい。

5.2 業態の変化

宿泊に関して言えば，明治以前には十数軒の家並があったらしい。古老の話では，富岡屋・えび屋・大枡屋・小枡屋・かめ屋・合羽屋・銭屋・住吉屋・小村屋・北村屋・ふじ屋・竹屋などの家並があって，夫々旅人宿をしていたと言われている（図1参照）。

明治期に十数軒あったと言われる家並（旅人宿）は，昭和51年（1976）には7軒，平成16年（2004）には3軒にまで減少している。

一方，飲食店，土産物店は増加しており，これらのことから 観光面での評価としては，宿泊型から日帰型へ大きくシフトしたと言える（表5参照）。



図1 明治時代頃の門前町の家並

資料 「明治時代頃の谷汲山仁王門前の家並」「現在の谷汲山門前の町並略図」

表5 店舗業態の変遷

	1976年	2004年
旅館	7	3
飲食店	13	15
土産物屋	11	15
仏具等	2	4
その他	18	10
合計	51	47

（資料等により論者作成）

5.3 現地調査の結果

我々が調査したところでも，谷汲村門前町地区の現状は，平日ではほとんどの店が閉め



図2 閑散とする門前町の風景
論者撮影

られているということだ(勿論, 行楽シーズンは例外となる)。これは店舗の約7割が兼業であり, 専業とする店舗は3割にすぎないことに起因している。つまり, 平日は, “他の仕事=本業”をこなし, 休日に兼業として店を開く業態が中心であるのだ。我々が調査した日に限って言えば, 極めてゴーストタウン化している状況であった。

加えて, こうした状況を加速するシステム的な問題もある。平日には, 門前町通りまで自家用車が進入できるシステムとなっている。そのため, 社寺門横まで車で乗りつけることができ, 結果として通りは一層閑散としている。

6 門前町振興の展望

本稿で考察してきたことを前提に, 今後の谷汲村門前町の振興方策を展望して見よう。その方向には, 大きく三つあると思われる。一つ目がコミュニティの再構築, 二つ目にはネットワークの形成, 三つ目は今日的な観光ニーズへの対応である。以下, 詳述していく。

6.1 コミュニティの再構築

歴史的な面から見て, 門前町コミュニティは, 谷汲村の中でも独立した存在であったことが確認されている。村内の他のコミュニ

ティとの関係性を見れば閉じた形となっているが, 他方, 外部との観光・交流を視座とすれば“開かれた関係性”を特徴づけることも可能となろう。

現状, 門前町自体の魅力が低下している要因としては, 外部環境の変化への対応もさることながら, これらへの対応を可能とする内部のコミュニティの自立的・自発的・内発的な力の醸成, すなわちコミュニティの再構築過程が必要となる。そのためには, 谷汲山華厳寺との関係性の強化と, 門前町内部の関係性の強化が必要である。

前者は, 門前町の性格を規定する象徴的な存在である谷汲山華厳寺との今日的なつながりの強化である。例えば, 谷汲山華厳寺における講和など集いの機会を積極的に開催することなども有効な方法となるであろう。谷汲山華厳寺との一体感という漠然とした結びつきに対して, 交流促進における直接的な効果を疑問視する考え方もあるが, 我々の立場は, こうした一体感の中で生まれてくる“雰囲気”の醸成が交流促進にとって重要な視点となると考えている。

後者は, 内部の力の再構築であり, 通常は“まちづくり”と呼ばれる運動体の構築である。こうした動きを惹起するには, 強いリーダーシップが求められるが, “英雄待望論”に留まることなく, 継続的なコミュニケーションの中で, 相互の意識を高めていくことが求められる。

6.2 ネットワークの形成

現代版の巡礼をツアー化することが必要となるが, その際には, 地域の資源との連携を強化することが必要となる。現在でも, 谷汲山華厳寺参詣の後のメニューは, 多様なものがあることが確認されたが, 現状ではオンデマンド型の企画商品が中心であり, パッケージ

ジ化された商品提案にまでは至っていない。

そのため、今後の展望としては、地域資源 - 特に、「元湯 谷汲温泉 満願の湯(谷汲村)」、「池田温泉新館・本館(池田町)」、「久瀬温泉露天風呂 白龍の湯(久瀬村)」、「うすずみ温泉(根尾村)」などの温泉施設系、「揖斐峡」、「谷汲ゆり園(谷汲村)」、「夜叉ヶ池(坂内村)」、「淡墨桜(根尾村)」などの自然環境系、「両界山横蔵寺(谷汲村)」、「神社(坂内村)」、「洞泉寺(久瀬村)」などの歴史系、「谷汲踊⁴⁾」、「能郷の能・狂言」などの伝統芸能系 - のネットワークを形成し、揖斐(周辺)地域の滞在価値を高め、圏域の宿泊需要を高めることが必要である。

このように宿泊需要を高め、再び、旅館業態が活気づくことで、結果的に門前町の活気を高めることを展望していくことが重要となる。

6.3 今日的な観光ニーズへの対応

現在の観光ニーズをキーワード的に示すと、「体験(体感)」、「(生涯)学習」という言葉に代表されるであろう。特に、学習型の観光ニーズは、ますます高まりつつある。

こうした視点で、谷汲山華厳寺を見れば、多様な付加価値が提供できるだろう。例えば、歴史的な学習を地域のボランティアから聞くことができる、あるいは高僧から法話を聞くことができるなどの付加価値は、極めて高いインセンティブとなる。

そのためには、6.1で述べたように、上記のようなことが“非日常的な行事”としてではなく、日常的なコミュニティの行事になっていることが望まれる。

一方、コミュニティへの関わりが高まれば、自然と愛着も高まり、観光客へのボランティア意欲も醸成されることも考えられる。

今日の観光ニーズへ対応することは、コ

ミュニティの価値を高めることと表裏一体の関係にある。

おわりに

本稿は、谷汲村門前町をフィールドとして取上げ、門前町の活性化方策を歴史的な流れにヒントを得ながら、また、コミュニティの内発的な力を引き出すことを意識しながら、考察することに独自性があると自負している。このテーマの動機となったのは、谷汲村で開催される「第7回全国門前町サミット2004 in 谷汲」へ関わることになったことが契機となっている。そのため、短期間で概括的論考になったことは否めない。歴史的な視点、地理学的な視点、社会学的な視点、宗教学的な視点などを統合しないと門前町の本質的な部分を掘り下げることが困難であると思われる。

勿論、それら学問の領域統合を前提して門前町の今後を展望しなければならないが、それは今後の課題としたい。

注

- 1) 寺は延暦17年(798)豊然上人が開基した。願主は奥州会津郡黒河郷富岡の住人、大口大領(おおぐちたいりょう)で、京都で観音像を造らせ、奥州へ帰る途中、観音を霊夢によって、この地に留めた。観音像に華厳経が書かれていたことから寺号をつくり、谷々の衆徒が湧き出る油を汲んで常灯に使ったことから「谷汲山」と名づけた。谷汲山華厳寺の由来である。
- 2) 谷汲村にある谷汲山華厳寺は、昔から西国三十三番の札所として知られ参詣が多かったため、井深重剛をはじめ地元の有力者23名が、参詣者の利便を図ろうとして発起人となり美濃電気軌道に申請した。大正12年2月免許を得た。大正13年、

谷汲鉄道株式会社を設立した。同社から取締役社長に井深重剛が就任し、本社を揖斐郡大野村黒野（現在の黒野町）に置いた。工事は美濃電気軌道に委託し、同社の北方・黒野間延長工事と一緒に進められ、大正15年、黒野・谷汲間11.2kmを美濃電気軌道の揖斐線とともに開業した。同社の営業状態は電力を美濃電気軌道から受電し、一時間おきに運転した。黒野・谷汲間を40分間で走り、貨客とも揖斐線と相互乗り入れをしたが、貨物は岐阜での他線連絡ができなかった為に利用度は少なかった。

営業については谷汲山のご開帳が行なわれる時以外は欠損続きで、本社員は支配人以下3名の少数であった。昭和11年に美濃電気軌道を合併した名古屋鉄道株式会社へ経営を委任し、本社を同社内に移したのである。

昭和18年名古屋鉄道と合併契約を結び、翌年合併した。合併後は名鉄谷汲線として人々に親しまれてきたが、平成13年9月廃線となった。

- 3) この巡礼の起源について、縁起に大和国長谷寺の得道上人が魔王宮へ参詣した折、焰王が得道に語って、「日本国に生身の観音三三昧がある。紀伊那智山の如意輪に始まり、美濃谷汲の十一面までが、これである。この三三尊を詣れば地獄・餓鬼・畜生・修羅など六道の区域を脱け出し、仏土に生れ変わる功德がある。この旨を衆生に示し、敬って礼拝するようにせよ。」と告げたとされている。

- 4) 起源は鎌倉時代に源氏が壇ノ浦に平氏一族を亡し、鎌倉に凱旋した将兵が戦勝を祝って踊ったと言われている武者踊である。この為鎌倉踊とも言った。その後徳川幕府中期に大旱魃があり、農民は一心に氏神様に雨乞いして神楽として踊ったために雨乞踊とも称した。明治末年頃までは各部ごとにシナイと太鼓を身につけて、若者が交替で各神社を廻って踊った。部落によっては大正中期頃まで続いたところもある。尚、踊りとしてはシナイを使用する場合と使用しない場合があった。特に雨乞踊は太鼓に鉦鼓・笛をふく蓑笠を付けてシナイは無しで踊った。

その後社会情勢の変化に伴って次第に衰退してシナイや太鼓も整理され、後継者がいないままに過ぎ去り遂にこの踊りを知っているものがだんだん少なくなった。これを憂いた同志が集まり昭和27年に谷汲踊保存会を作って、往年の踊り復興することになった。即ち古記録を調べたり古老の話を聞いたりして、踊り方・唄い方を会得して踊る時の道具等を整備した。翌28年に復興記念披露大会を開催した。続いて県の無形文化財の指定を受けた。

参考文献

1. 「門前町」, 1982, 古今書店, 藤本利治
2. 「谷汲村史」, 1977.7.1, 谷汲村
3. 「平成15年岐阜県レクリエーション動態調査結果概要」, 岐阜県農林商工部商工局